

書く意欲を引き出し、書く力を育てる実践的試み

竜田 徹

1 はじめに

本稿では、新聞記事を利用して書く意欲と書く力を育成する国語科の授業を提案する。

提案にあたって本稿は「PISA型読解力」に注目する。ことは学びにおいて子どもたちの書く意欲や書く力を育てる重要性を再確認させたという点で、PISA型読解力が私たちに提起したものは大きかった。なかでも自由記述問題における高い無答率は、さまざまなテキストに対してことばで表現するという活動に子どもたちを十分向き合わせてきたかどうかという点で、これまでの書くことの学習指導を見直す手がかりとなる。単にPISA型読解力を伸ばそうという意味ではなく、国語の授業を通して子どもたちの書く意欲と書く力をいかに高めていくかという視点でこの提案を行いたい。はじめに、PISA型読解力とのかかわりにおける国語科の役割について、および新聞記事を教材化することの意義について、考えるところを述べようと思う。

2 PISA型読解力と国語科の役割

PISA型読解力とは「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」である。この「読解力」は、「情報化・国際化社会におけるグローバル・スタンダードとしてのリテラシー」の一つとして、「個人の人生における成功と社会の発展に貢献するために、「すべての個人」にとって「幅広い文脈」で役に立つ能力とされている」といわれる。

PISA型読解力とのかかわりにおいて国語科が果たすべき役割とは何か。それは、「いかなるテキストに出合ったときにも自分の考えたことや感じたことを適切に表現する能力を育てること」であると考えられる。では、なぜこのようなことが必要なのか。

PISA調査では、設問に対してともかく何か表現しないことにはテキストを理解し利用し熟考する能力は身につけていないものと見なされてしまう。同様に国語科においても他教科等においても、

指導者が授業を展開し学習者を評価する上で学習者のことばによる表現に負うところは少なくない。したがって学習者にとってみれば、頭では分かっていたとしても表現できない(表現しない)ために自分の評価が落ちてしまうという事態も起こり得る。

自分の成績だけの問題ではない。大村はまは「筆不精と国語学習」と題する文章³において、書くことにかかわるあらゆる力を持つていてもその人が「もし筆不精ならば」、それは発揮される機会を得ず、「その人をとりまく人びとにとっては、書く力を持っていないために書かれず困ったのと、同じにしか受け取れないのではないか」と述べている。つまり、「気ばらずに、らくに」書くというのができないことは「書くことのいろいろな力を、ゼロにしてしまう」。機会に応じて実際に書けるということは、自分以外のさまざまな人々の「便利さ」や「幸福」にもつながっている。

まとめるなら、自分の能力を他者に誤解されないために、また自分の書く力を他者とのかわりあいのなかで発揮するために、上述したことばの力が求められる。その力を国語科は育てる必要がある。

3 新聞記事を教材化することの意義

次に教材である。PISA A型読解力の育成を目指すとき教材として新聞記事を利用することは効果的である。その理由を二点挙げる。一つは新聞そのものが「多様なテキストの集合」だからである。PISA A調査の分析に「連続型テキスト」(文章)や「非連続型テキスト」(データを視覚的に表現したもの)という用語がしばしば見ら

れるように、「読解力」問題の特徴の一つは多種多様な文章が題材とされる点にある。新聞記事には表や図、イラストや写真を含むものも多い。いかなるテキストにもしなやかに対応できる力を育てるという目標に照らして、新聞は優れた教材性を持つといえる。

理由のもう一つには新聞の社会的役割が挙げられる。新聞は私たちが効果的に社会参加するための有力な情報源であり、「民主主義社会をより強固に守るために不可欠な社会的要素である」といわれる。また、ニュース等で引用されたり図書館等で提供されたりするなど信頼性の高いメディアとして広く社会に浸透しており、コミュニケーションの前提として新聞が果たしている役割は大きいといえる。そうした新聞を国語の授業で取り上げることによって、子どもたちとその社会的役割を理解させたり、新聞等のメディアと自分自身の関係を考えさせたりすることができるだろう。

このように、さまざまなテキストを提供し人々の効果的な社会参加を支えるという新聞そのものはたつきは、PISA A型読解力の趣旨と重なるものである。このことからPISA A型読解力を育成する教材として新聞を利用することは適切かつ有効であると考えられる。

4 実践「コメント王」

以上を踏まえて、子どもたちがさまざまなテキストに向き合い、ともかく何かことは表現してみようとする意欲を育てることを目標に実践を行った。以下ではその実践を紹介する。以前学習塾で国語を教えていたときの実践である。「構想」「実際」「考察」の各項に

分けて述べる。

(1) 構 想

【單元名】「コメント王」 新聞記事を読んでコメントを書く

【実施時期】二〇〇七年六月から二〇〇八年七月まで。

【対象者等】対象者は、小学校六年生から高校三年生までの計六名。より詳しくは、小学六年女子二名、中学三年女子三名、高校三年女子一名(二〇〇七年六月現在)。授業形態は、学習者二名または一名を指導者一名が担当する個別指導形態。授業頻度は毎週一回。

【学習者観】総括的に次の二点の現状を挙げる。

(i) 「旧来の読解力」中心の学習であること

子どもたちは塾の通常の授業において、学年ごとに指定されたテキスト(問題集)に取り組んでいる。そのテキストは、説明文や小説などの文章を読んであとの設問に答えるという形式で構成されており、子どもたちには文章を読んでその内容を読み取る力、いわゆる「旧来の読解力」が求められている。塾での国語の学習は、設問の求めに応じて内容を読み解いていくことが中心である。

そこで子どもたちには、設問を通さずに文章に向き合うことが必要だと感じた。ことばで表現することの手がかりを設問によってつかむのではなく、文章とのかかわりによって自分でつかむ活動をさせたいと思った。私たちが日常的に接する文章にふつう設問はない。日常生活のなかで出合うさまざまなテキストに対して自分なりの見方を構築する習慣を育てたいと考えた。

(ii) 長い授業時間に集中が続かないこと

塾の通常授業時間は一コマあたり七〇分と比較的長い。そのため、とくに小中学生にとっては授業時間中ずっと集中力を持続することが難しい。また、授業開始後しばらくのあいだは休憩時間の勢いを引きずって授業に集中できない子どももいる。

そこで、長い授業時間の流れに変化を与えることが必要であった。授業開始後のできるだけ早いうちに子どもたちを集中させ思考を活性化させることのできる、効果的な試みを模索していた。

【指導観】右をもとに指導目標と指導方法を次のように設定する。

まず、学習者観(i)をもとにすると、本実践のねらいは文部科学省(2005)『読解力向上に関する指導資料』に示された「指導のねらい」のうちの次の点に定めることが適切である。

ウ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること(イ) 自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成⁶⁾

ただし、この目標に含まれている「簡潔に」という点については、今回は書くべき機会に書くこととする意欲を育てることを大切にしたいという考えから、大きく取り上げないこととする。

また、学習者観(ii)をもとに指導方法を考えるとき、授業の開始直後十分間程度を用いて継続的に取り組ませる指導、すなわち帯単元式の指導を行うことが有効である。

【教材観】(2) 実際の項で述べる。

【学習指導過程】授業開始直後十分間を用い次の順序で展開する。

1. 指導者は、新聞記事とコメント記入欄(余白)とを一枚におさ

めたプリントを学習者に配布する。

2. 指導者は、記事を読んで感じたことや考えたこと（記事についてのコメント）を書くように学習者に伝える。
3. 学習者は、記事を黙読する。記事について分からないこと、読めない漢字、意味の分からない語句などを指導者に質問する。
4. 学習者は、記事についてのコメントを書く。自分の名前も記す。
5. 指導者は、学習者が書き終えたことを確認してプリントを回収する。これ以降は通常の授業を行う。
6. 指導者は、授業後に学習者のコメントにコメントする。そして次の授業時に学習者に手渡す。

【指導上の留意点】指導に際しては次の三点に留意する。

1. 活動中は新聞記事に関する指導者の考えを差し挟まないように心がける。学習者にゼロからコメントを作り上げる練習をさせたいからである。
2. コメントの分量（字数）は問題にしない。感じたことや考えたことをコメントに表現できることをまず重視し、強いてたくさん書かせたり書きたいのに制限したりしない。
3. 学習者のコメントに対する指導者のコメントでは、学習者のコメントを指導者が受けとめたことが学習者に伝わるように、記事に対してコメントできたのだという自信が学習者に生まれるように、一人ひとりの学習者に応じた適切なコメントを心がける。具体的には、学習者のコメントを引用したり指導者なりに言い換えたりしながら、新聞記事に対してコメントできたことを励ますようにする。

(2) 実 際

約一年間の実施期間中、担当した子どもたちと本実践に取り組んだ。授業では(1)の構想を弾力的に実施した。以下では、実践開始直後の連続三回の取り組みを紹介する。この三回は「コメント王」の活動が授業に定着するまでの試行錯誤の過程であり、この実践における成果や課題を示しやすく考えた。それぞれの回について、扱った新聞記事の見出しと概要、教材観と指導の実際、学習者が作成したコメントの一部を記すことにする。

【第一回】二〇〇七年六月九日(十七)

「記事と概要」「私の担任、私が選ぶ」(『朝日新聞』二〇〇五年十二月十六日) 高知県のある県立高校が次年度の担任を生徒自身に選ばせる「希望担任制」を導入する。公立高校では例がないと見られる取り組みで、生徒たちは掲示板に貼り出された顔写真入りの「担任候補者一覧」を見ながら希望の担任を検討する。生徒の学習意欲を高めるのがねらいだが、選択される先生たちには戸惑いも出ている。

【教材観と指導の実際】

記事の内容は学習者にとって身近な学校の話題であり関心を持ちやすい。また、記事には生徒、教諭、校長、有識者の四つの立場からの意見も示されており、学習者が自分の意見を持つための手がかりとなる。様子を伝える写真もある。これらのことから、単元「コメント王」の導入教材としてふさわしいと考えた。

ただ文章は長め(約一四〇〇字)で、小中学生にとっては「一環」「チューター」「主體的」など難解な語句も含まれている。そこで、小中学生に対してはまず指導者が補足を交えながら一度音読しそれ

からコメントを書かせた。次に引くのは小学六年・りか（仮名。以下同じ）のコメントである。

すごく失礼（？）かもしれないけど、「校長先生へ」校長先生はもう少し先生のことを考えたほうがいいと思う。理由はそれぞれ信条や抱負を持っていて、この制度に戸まどつていたりしているから。先生の立場になるとかわいそうだと思う。確かに生徒にはいいかもしれないけど、校長先生なら、学校全体を良くするためには、両方の事を考えた制度をつくらなければならないと思う。

これに対して指導者は次のようにコメントした（朱筆）。「生徒だけでなく、教師のことも考えて制度を作るべきだという意見だと読み取りました。上にたつ人は、いろいろな立場の身になることが大切。校長先生は、それもふまえて、このような決断をしたのかもしれない。併せて学習者のコメントの良いところに朱の波線を付して返却した。このような処理を毎回繰り返し行つた。

「学習者が作成したコメント」

（中学三年・えり）最近、教師が生徒の目線に合わせすぎだと思ふ。生徒は教師に教えてもらう立場なので学習意欲を教師に引き出してもらうのではなく、自分から引き出さなければならぬと思う。しかもストレス社会を生き抜くための、これ以上ストレスをつくらなければならない。

（中学三年・りさ）ポスターに「それぞれの信条や抱負が記されている」とあるが、これは、生徒が選挙する際に、その先生の教育方針、また、めざしているものなどが分かり、より選びやすくなるため、よい案だと思つた。

（高校三年・はるか）この記事の生徒の意見で、「嫌いな先生に当たらずにすむ」という意見と、「やってみないと分からない」という意見に分かれていたが、私は後者に賛成である。確かに、先生と生徒の間で性格が合う合わないことがあると思うが、色んな先生との出会い、色んなことを学ぶことが大切だと思うからである。

【第二回】二〇〇七年六月二六日（土）

「記事と概要」「夜道明るく誘導します」（朝日新聞）二〇〇七年六月一三日）視覚障害者や高齢者にとって、視界が悪くなる夜の街は危険が多い。暗い道路を安全に歩けるよう対策に乗り出す自治体が増えつつある中、電機メーカーなどが音声や発光ダイオード（LED）などを使って歩行者を誘導する商品の開発に注力しており、「近い将来数兆円規模の市場になる」との観測もあるという。電機メーカーなどが中心になって東京都内で実証実験が行われた。

「教材観と指導の実際」

記事は歩行者を誘導する道路設備についての新しい試みを紹介している。街でよく見かける標識が歩行者とりわけ高齢者の立場で作られているとは必ずしもいえない現状が指摘されていて興味深い。

学習者は記事から歩行者用道路設備についての新しい情報を手に入れることはできる。しかし、この記事は第一回の記事と比べると学習者の意見を喚起する力は弱いと思われる。一読「何を書いたらよいのか分からない」と感じられる記事に対してコメントを作成することを通して、記事と自分の接点を見つける自信をつかんでほしいと考えた。結果、記事で言及されている設置コスト（金額）に注目したコメントが多くみられた。次に挙げるのもその一つである。

(中学三年・りきこ) 歩行者を誘導する商品の開発はすばらしいと思う。が、この商品を買おうとなると予算の問題もでてくる。一つ十七万となるとかなりの高出費になる。材料費を下げ、予算の少ない市でも買えるような値段にしてほしい。

「問題点に注目できたところが、よい。いま、市町村は、予算が厳しい状況のところが多くなっているのですね。安くできるようにすれば、さらによいですな」(指導者コメント)。

「学習者が作成したコメント」

(小学六年 せいこ) 浅草で、視覚障害者や高齢者の立場になって考え、実験をしながら実感し、それから高いところにある標識を地面につけたりして、その苦労している人たちのことを思いやっているやさしさがあっていいと思った。

(中学三年 きこ) LED境界表示灯が十七万円というのは高いけれど十七万円で(指導者注)高齢者がうっかり車道に)踏み出してしまいう事故を防げるのなりたいと思う。

【第三回】二〇〇七年六月三日(十七)

「記事と概要」 「天声人語 仙台市青葉通のケヤキ並木」(『朝日新聞』二〇〇六年六月一日) 仙台市が、街のシンボル・ケヤキの処遇をめぐって紛糾している。二二三本あるうち五十本が地下鉄駅の新設のために撤去されるのだが、これを伐採するか(一本六〇万円)、よそに移植するか(一本三二〇万円)で市民の意見が割れている。先日市民一人にアンケートをしたところ、回答者の半数強が伐採を支持した。移植派の市長は困惑している。

【教材観と指導の実際】

コラムの文章は構成、内容とも平易ではなく教材化には注意が必要である。この記事は、移植派と伐採派の対立を読むことができれば自分の意見を考えられるだろうと判断して教材化した。

この記事では、仙台市のケヤキ並木の処遇について述べるなかで、岐阜県の庄川桜の事例(ダム建設で水没する村の桜の巨樹を移植で救った話)を引用している。その読解がやや難しかった。次に引用する小学六年・せいこのコメントには、本論(仙台市のケヤキ)と事例(庄川桜)の区別ができなかったことがうかがえる。

木を移植するには時間やお金もかかり、大変だけど、それでもダムにしようとする村の木を移植しようとしたことは、それだけ木を守ろうとする気持ちがあるのかなと思いました。

「ダムに沈んだかもしれない木を救った話。心に残る」(指導者のコメント)。この活動中せいこは「もっと簡単な記事にして」と言った。コメント以前の読むことへの負担を大きくしてしまった。

「学習者が作成したコメント」

(小学六年・りか) 私は、どっちかという、移植したほうがいいと思う。理由は、この新聞は昔のエピソードを語っていて移植派のよくな気がするし、たとえお金がかかっても、残しておくべきものがあると思うから。どっちになっても木を有効に使ってほしい。

(中学三年・きこ) 私は移植してほしいです。理由は、移植だと三二〇万円した木ということで、語り継がれる市民の財産となるかもしれないからです。

(高校三年・はるか) 通り道などに木があるということは、人の気分を何となく変えてくれると思う。私は田舎に住んでいるため、木が

なくなるといふ感覚はよく分らないが、建設する場所を見直すべきではないだろうか。

(3) 考 察

三つの事例をもとに成果と課題を考察する。

まず成果を二点述べるが、これは「コメント王」の教材選定上の工夫と表裏一体であった。そこで、それぞれ工夫について記した上で成果を述べることにする。

(一) 難しめの記事であってもコメントを書くことができる

工夫の一点目は、あえて難しい記事をも題材に取り上げることである。ここでの「難しい」には二つの意味がある。

一つは、語句や論理展開の難しさ、つまり何が書いてあるかをつかむのが難しいものである。日常生活における私たちと文章とのかわりかたをふり返ると、分からない部分は飛ばしながら、読み進めることによって理解していくことがままある。これを踏まえると、教材とする記事は子どもたちにとっていくつか難しい部分を含むもの的大意はつかめるといふ程度のものが適切だと思われる。今回の実践では、難解な記事に対しても子どもたちはじつくりと取り組むことができた。指導者がすぐ近くにいて質問しやすい個別指導形態であったことも、その要因に数えてよいであろう。

「難しい」のもう一つの意味は、コメントを書きにくい、コメントすべきことが思い浮かばないという意味での難しさである。新聞記事のなかには、第二回「道路誘導設備」の記事や第三回「ケヤキ並木」の記事のように、内容は読み取れてもそれは自分と直接関係が

あるわけではなく、読み手としての意見を抱くには至りにくい種類のものが少なくない。そういう記事でこそ、記事と自分との接点を作る力が存分に発揮され身についていくのだろうと思う。

たとえば、第三回における高校三年・はるかのコメントは、「地下鉄駅の建設見直し」に言及している点では記事の論点から外れてしまっている。しかしながら、「田舎」に住む自分自身の立場から「木」と「人」の関係に着眼した書き出しには、読み手を引きつける力がある。ここを認めてやりたいと思う。育てたいのはその記事からコメントすべきところを探る力、自分で面白さを見出す力である。そのためにも指導者には、教材とする新聞記事のなかに学習者に気づかせたい勘所を一つでも多く見つけておくことが求められる。

もちろん、書いてあることがほとんど分からない、記事から読み取れることが何もないといった極端な記事は、教材として適切でない。文章に向き合おうとする意欲を削ぐのではなく、今回はどんな記事だろうか、どういうふうに通じやすいかなどと子どもたちが意気込むことにつながるように、記事の教材性の適否を判断することが求められる。

(二) コメントを通して記事や書き手と対話することができる

指導上の工夫の二点目は、記事作成者の名前が分かる記事を取り上げるようにすることである。

近年、新聞記事の末尾に記事担当者の名前を見ることが多くなつた。管見によれば、記事の責任の所在を明らかにし「顔の見える記事」を目指すという新聞各社の取り組みの一環らしい。

こうした動きは、新聞を取り入れた学習指導に良い影響をもたら

すものと考えられる。というのは、テキストの向こう側にはその書き手がいるという姿勢を子どもたちに持たせることが、PISA型読解力の育成を目指す授業では大切だからである。

書き手の「見える」テキストを相手にすることによって、子どもたちはテキストに対する意見や感想を、相手意識をもって表現することができる。また、記事を執筆する筆者の姿を想像することにもつながる。たとえば、第一回における小学六年・りかのコメントは、「校長先生へ」という題で始まっているように、強い相手意識を持って書いていることが伝わってくる文章である。また、同じく第三回の「この新聞は昔のエピソードを語っていて移植派のような気がする」には、書き手の立場への言及が認められる。このような書き手を顧慮することのくり返しが、書き手の態度や書きぶりを評価しながら文章を読む力につながると思われる。

続いて三回の「コメント王」から見えてきた課題を二点挙げる。
(i) 学年に応じた記事の選定をする

課題の一点目は、学年（発達段階）に応じた記事の選定をする点である。とりわけ小学生には配慮が必要である。読むことだけで精一杯というような記事は、書くことへの意欲を減退させるといって適切でないと思われる。成果(i)に述べた「難しさ」とのバランスが求められるといえる。

改善の方法として一つには、一般紙ではなく「子ども新聞」等の種類から教材選定をすることが挙げられる。また、複数の新聞記事を準備し子どもの実態に応じて使い分ける方法も考えられる。

(ii) 記事への切り込み方に変化を与える

課題の二点目は、子どもたちの記事への切り込み方をより豊かにして、さまざまな観点からコメントを書けるようにすることである。そのためには指導者の役割が重要になる。感じたことや考えたことのコメントを毎回同じように書かせるだけでなく、課題を設けたりその場で問いかけたりすることも有効であろう。たとえば、コメントを書く前に「記事にある○○さんに向けて書いてらん」「この記事の上手なところ、工夫されていると思うことを挙げてみよう」などと投げ掛けてみるのも一案である。

手引きの工夫で子どもたちの記事の読み方に変化を与える。何も助言せずにコメントする子どもたちを見守る。これらを組み合わせながら継続することで、いつか子どもたちが指導者の手引きのことはを内在化し自らのコメントの幅を広げていくことが期待できる。

以上に、学習塾で実践した「コメント王」を紹介・考察し、成果と課題を二点ずつ指摘した。

5 おわりに

最後に、書く意欲や能力の育成と「実の場」や「伝え合う力」とのかかわりについて考えるところを述べて、本稿の結びとしたい。

思うにこれまでの国語科は、その一面では、「実の場」という考え方によって子どもたちに学習意欲や学習の必然性を与えてきた。たとえば、読むことの授業では文章を読み込まずにはいられない状況を作り出す。話すこと・聞くことの授業では真剣に討論せざるをえ

ない状況を準備する。このように授業における学習者の活動を必然化する。そうすれば、子どもたちのことばの活動はおのずと使命感や責任感を帯びたものになる。そうした状況のなかで生きてはたらくことばの力は育まれると考えてきた。この「実の場」の考え方は国語科の授業構想において今後も留意されるべきである。

しかし、PISA型読解力を育成する国語科では、そのみでは不十分ではないだろうか。そこで求められるのはテキストと自分の接点を子ども自身が築く力だからである。指導者が「実の場」の組織などによって面白い活動を準備して子どもたちの意欲を引き出す試みももちろん重要である。けれどもそれとともに、子どもたちが自身がテキストとのかかわりによってその面白さを発見し、自分の意欲を引き出すという発想もこれからは必要なのではないか。

意図されているかどうかは別として、PISA調査で子どもたちに否応なく要求されるのは、〈必ずしもことばで表現する必要のないこと〉に対してもことばで表現してみようとする意欲であると考えられる。いかなるテキストに出合ったときにも、それについて求めに応じて思考し表現する力が求められる。このテキストは自分には当面関係がないから、すでに分かりきっているから、面白そうではないからなどといってその場から立ち去るような姿勢は改めなければならぬ。改めなければ、それは高い無答率という形で再び現れることになるであろう。

ここに提案した「コメント王」は、簡単にいえば「子どもたちに新聞記事を与えてコメントを書かせる」という実践である。この取り組みは「機会の充実」といえば聞こえは良い。しかし子どもたち

にとつてみれば、読む必要もないテキストを突きつけられしかも何か書かなければならないのだから、大変なことを強いているようにも見える。そのうえ「何をコメントすればいいの」と言いたくなるような疎遠な話題も取り上げられるのだから、子どもたちは大きな負荷を感じているのかもしれない。

しかし、PISA型読解力の背景を踏まえた書くことの学習指導は、子どもたちが思わず「何をコメントすればいいの」とつぶやき困ってしまうようなテキストを、指導者としての責任をもって差し出していくことでもあると思う。「コメント王」の実践を通して少なくとも、子どもたちにテキストと自分との結び目を作ろうとする意欲が身についていくということは指摘してよいであろう。そして、書くことの学習に子どもたちが自ら向かおうとするその意欲は、おそらく書く力ととらえてもよいであろう。書く意欲を自らに引き出すことも書く力である。そういう意味での書く力を育てる実践的試みが求められていると思われる。

そのようなことばの力を持つ人には何ができるだろうか。その一つとして、「人懐こい」とか「話し好き」とはまた違う次元で、「この人とは別に話さなくてもいいかもしれないけれど、ちょっと声をかけてみようかな」「このテキストは別に読む必要はないけれど、ちょっと読んでみようかな」と思えるようになることは期待してよいであろう。ことばを通して他者と「ちょっとかかわってみようかな」という心のごめきは、未知のものと同じく合おうとする姿勢であり、人との伝え合いの素地である。相手の立場や考えを尊重するとは、必ずしも黙して相手とかわらないということではない。そ

うではなくて、ことばを通して相手とかかわり相手を知ることであらうと思う。その意味で、PIISA型読解力にかかわる書く意欲や書く力を育てるということは、「伝え合う力」の素地を子どもたちに育てると重要な一面を持っていることができる。

6 参考文献・注

- 大村はま(1983)『大村はま国語教室 第五巻』筑摩書房
小山恵美子(1992)「国語学力論の再検討 「態度主義批判」における可能性と「意欲」」『国語科教育』39
河村好市(2008.1)「NIEと学習活動」『日本語学』
齋藤孝(2007)『コメント力「できる人」はここがちがう』筑摩書房
塚田泰彦(1999)「学習者のテキスト表現過程を支える21世紀のパラダイム」『国語科教育』46
鶴田清司(2007.6)「いままぜPIISA型読解力に注目するか 情報化・国際化社会に必要なリテラシー」『月刊国語教育』
前田良宣(2007.7.4)「めざせ！「コメント王」」『中日新聞』
<http://www.chunichi.co.jp/nief/amosiv/2000704.htm> で閲覧できる(2010.1.22確認)。
森田伸子(2006.4)「学力論争とリテラシー 教育学的二項図式に訣別するために」『現代思想』
文部科学省(2005)『読解力向上に関する指導資料 PISA調

- 査(読解力)の結果分析と改善の方向』東洋館出版社
山元隆春(2006)「文学の読みが「対話的」となる条件 “point-taken reading”：概念の検討を手がかりとして」『世羅博昭先生御退任記念論集』世羅博昭先生御退任記念論集刊行会
吉田裕久(2006)「読解力」をどう捉え、どう育てるか 今日
の学力としての「読解力」の内実と実践化」『国語教育研究』47

注

- 1 文部科学省(2005) 1ページ
- 2 鶴田清司(2007.6) 13ページ
- 3 大村はま(1983) 149-156ページ
- 4 河村好市(2008.1) 30-31ページ
- 5 この単元名(活動名)については左の「付記」を参照のこと。
- 6 文部科学省(2005) 17ページ

付記 本稿で提案した「コメント王」は、高校時代の恩師・前田良宣先生の取り組みをほぼそのままの形で実践したものである。当時の取り組みがことばの力の意義ある部分を担い、今日的重要にも応えるものであることを本稿を通して論じることができたとすれば幸いである。ここに記して前田先生に感謝を申し上げます。